

タイトル：2012 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2012年12月1日（土）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

Production and employment of artillery in Iran and British influences, 1810–1848

小澤 一郎（東京大学大学院人文社会系研究科）

19世紀後半のいわゆる「西洋」における兵器技術の革新がその後の世界の歴史に多大な影響を与えたことは常々指摘されてきているが、必ずしもその全容が明らかにされてきたとはいえない。報告者はイランという場に視点をおいてこの問題を明らかにすることを目指しているが、今回の報告ではそうした「革新」の直前、19世紀前半におけるイランへの火砲製造・使用技術の移転とイギリス帝国の関与を主題として論じることで、世紀後半に生じる変化を明らかにするための足がかりとすることを試みた。

報告では、前提として18世紀までのイラン高原における火器全般の製造・使用の状況を確認した上で、1810年代より始まるイギリス人の火砲の製造・使用技術の移転への関与を分析した。そのなかで、イギリス人の指導の下で比較的短期間のうちにイギリス式の火砲の製造・使用が軌道に乗ったこと、一方でその成果は長期間持続するものでなかったことが明らかとなった。こうした傾向の要因については現時点で確たる答えは出ていないが、暫定的な結論として、火砲製造や砲兵隊の維持への財政的裏づけが不十分であったこと、人材育成がそれ以後の時代に比べると組織的には行われておらず、体系的な知識を備えた人材の供給において不備があった可能性があることを指摘した。一方で、短期間で火砲製造が軌道に乗った背景には、当時のイラン高原におけるある程度高水準の技術の存在があり、少なくとも火器の製造に関して、この時期には一般的に考えられているほど大きな技術的格差は存在しなかったことを示唆し、発表を締めくくった。

コメンテーターであるマンスール・セファトゴル先生からは、報告について多くの有益な助言をいただいた。そのうち、イランにおける研究動向の把握不足やロシア側史料の等閑視といった点は報告者の怠慢であり、今後鋭意改善しなければならないところである。加えて、今回の報告で取り扱わなかったサファヴィー朝期の状況にも目を向けるべきであると指摘された。以上のようなコメントを咀嚼することを通して自分の研究を見直す機会を作ることができ、今後の研究に対する意欲を大いにかきたてられた。また、今回の報告では原稿を読み上げるという形を取らず、スライドを参照しつつ聴衆に語りかける形式をとった。幸い、プレゼンテーションのやり方については高い評価をいただくことが出来、良い経験となった。

報告後には、デイル・エルカマルとベイト・エッディーンの両史跡、およびバイルート西部のシーア派地区を訪問した。それぞれ、バイルート中心部とは全く趣を異にする地域であり、この小さな国の宗教的・文化的多様性を実感することができた。また、最終日にはドイツ東洋学研究所を訪問する機会にも恵まれた。